

# 外国語学習における仮説（言語干渉）の検討

諏訪部 真

0. 1 筆者はすでに、外国語学習での干渉の問題を、日・英両語の音節構造を対照分析することを通して（1969）、また、日本語のモーラ音素を扱うことによって（1971）具体的に触れてきた。この小論は、母国語と外国語の個々のことばを問題にするのではなく、母国語からの言語干渉の事実が生ずる、という従来の仮説—この理論的な基礎に対しては、70年前後から多くの研究者によって、言語学の方面から、また言語心理学の方面からも批判されてきているのだが—その仮説を具体的に二つのテーマを通して、今までの考え方、それに対する批判に触れ、なおかつ批判に対して残り得るものなどについて述べたいと思う。

## 1. 言語干渉

一つの言語がまったく孤立しているということはめったにない。ある言語共同体は、遅かれ早かれ、他の言語共同体と何らかの形で関係を持つようになる。この言語間関係を示すために接触（contact）という言葉がWeinreich（1953）によって用いられるようになったことは、よく知られていることである。彼が言う言語接触の事実は、二言語併用（bilingualism）—すなわちスイスの国境地帯の住民がアルマンック語の地方語であるシュバイツァティン語とロマンス語を話す問題—を前提としているのであるが、ある言語だけしか使わないという極端な潔癖主義は別として、個人、団体を問わず、二つまたそれ以上の言語を使う場合に言語干渉（language interference）がおこる。Haugen（1953）が米国でのノルウェー人移民達の言語活動を調査して言語借用（linguistic borrowing）—母国語であるノルウェー語に、英語の表現を使用する—という事実を明らかにしたが、言語借用も言語干渉の具体的なあらわれであり、同じ現象であると考えられる。

また一人の人間が行う二つの学習の問題として、言語干渉を考えると、先に行った学習が後の学習に影響を与える現象を、学習の転移（transfer）としてとらえる外国語学習の場合、プラスの転移ではなく、マイナスの転移をさして干渉というのであり、学習を促進させるものでなく、妨害するものに干渉の言葉を用いるのである。

もっとも Weinreich や Haugen の研究は言語推移（language shift）に関して基本的な研究であると評価はするが、外国語学習で問題にする、母国語からの干渉という問題、また具体的な干渉の問題には彼らの研究は有効ではないという批判も出されている。H. C. Dulay, M. K. Burt（1972）参照。

## 2. 二言語間の構造の差異が大であればあるほど学習者の困難点と干渉のおこる範囲が大きくなる

上にあげた Weinreich の仮説を Lado（1957）の言葉で言いかえれば、「母国語と類似の要

素は、学習者にとってごく簡単であろうし、母国語にない要素は非常に難しい。」ということになる。このことは改めて指摘するまでもなく、実際に外国語を教えている者は、自分の経験からも母国語と同じ種類に属する言語を学習する場合は困難点が少ないのに対して、語族がまったく異なる外国語を学習する場合にはその逆であることを知っている。例えばイタリア人が、同じロマンス語に属するスペイン語を学ぶより、中国語を学ぶ方がずっと難しいというように。

インド・ヨーロッパ語に属さず、朝鮮語との血縁関係は別として、孤立語とされている日本語を母国語とする我々は、語族が同じ外国語と、まったく異なる外国語を学習してその困難さを比較するということはできないのであるが、孤立語である日本語を母国語とする故に、構造の違い英語を学習する時に大きな困難を感じるのはごく当然である、と一般に考えられている。たとえば知日家で有名な E. ライシャワー博士が、日本人が英語を学ぶのはいかに難しいか、を日本人英語教師を前に話したのを聞いたことがある。(下線 筆者)

People who speak one of the Indo-European languages find it easier to learn another language of the same group. Among the few countries that are not polyglot or do not use an Indo-European language, only three stand out as important cases: China, Korea and Japan. The Chinese, however, have an advantage over the Japanese in that the structure of their language, curiously, happens to resemble modern English. The Koreans, though they speak a language much like Japanese, have the advantage of a much more complex phonetic system. So of all the countries in the world, Japan probably faces the largest problem in acquiring adequate use of a second language. (E. Reischauer 1964)

海外に出ている、同じアジアの学生たちを見ても、英語を第二国語としていて、それが一種の共通語になっているフィリピン人や、インド人の場合は別として、中国人、韓国人、インドネシア人などに比べて日本人は英語をよく使えないことを見聞きするにつけ、ライシャワー博士の論点は確かだと考えたりする。Jakobovits (1970) や James (1971) が引用している Cleveland 他 (1960) の研究によると、平均的な適性能力を持っているアメリカ人の学生が、日本語、中国語、ヴェトナム語を話す能力を得るのに要した時間を1とすると、ロシア語、ギリシャ語、フィンランド語の場合はその3分の2の時間で、またフランス語、ドイツ語、ルーマニア語はその2分の1の時間でよいと、報告されている。このことが事実だとするならば、外国語を学ぶ時に、その学習者が使っている母国語は何か、ということが、以後の学習を決定してしまうことになる。そして日本語を母国語とする日本人は、先天的に英語をうまく使うことができないということになってしまふ。

日本人が英語を使うことが「へた」とであるという問題は、言語構造の違い、という言語上の事実以外の問題、日本の社会構造、日本という国が置かれている地理的位置、文化的、歴史的背景など、いくつかのものがからみあっているので、この問題を構造の違いだけで簡単に結論を出すわけにはいかない。また Cleveland の報告にしても話す能力についての比較であったが、これが他のレベルの場合はどうであろうか。米国人が日本語を学ぶ時に、聞いた話したりする音声面での学習にくらべて、書いたり、読んだりすることはずっと難しいとよく言うのであるが、performance, perception 両面の細い点を取りあげて調べる必要があるように思う。場合によっては違ったデータが示されるかもしれない。しかしながら、上に述

べた Cleveland の報告や、経験的事実から、母国語と、学ぼうとする外国語との構造の差異、言いかえれば、二ヶ国語間に類似的なものがあるかないか、は学習に大きな影響を与えるということは認めてよいと考えられる。

この一般的に認められてきた仮説に対して W. R. Lee (1968) が反対意見を述べている。彼によると、英語を母国語とする者が、中国語を学ぶ際に、この二ヶ国語の間にある大きな違いが、かえって自国語だけを通して見る習慣的な見方から離れて、学習者を新しい軌道に乗せてくれるというのである。そして類似性の高い二ヶ国語を学習する場合、彼の場合には、すでにかなり話せるようになっていたスペイン語の他に、イタリア語を学ぼうとしたのであるが、学ぼうとするイタリア語と既習のスペイン語との区別が難しく、ついにはイタリア語の学習をあきらめたというのである。母国語と学ぼうとする外国語との類似性がかえって干渉をもたらすということは Yao Shen によって早く指摘されているが (Dipietro 1971), Lee の意見は余りに印象的すぎて、実際の学習のどの面、どんな言語的カテゴリーで、具体的にどんなことで問題がおきたのかよく理解できない。ここで Lee の提出した問題に反論してみる。L1 (たとえばフランス語) を母国語とする者が、L2 (たとえばイタリア語) を学ぶとする。L1 と L2 は同族語であり、sister language であるから学習者が持っている L1 の言語知識(あるいは L1 についての言語能力ともいえる) が、二言語間にあるいくつかのチャンネルを通して L2 にもプラスとなって働く筈である。言いかえれば、母国語にあるような言語的な要素、あるいは言語的カテゴリーが外国語にも存在する場合、学習にはプラスになって働くと考えられる。むしろ L1 と L2 の間にある類似性が、マイナスの干渉をおこすこともある。しかし、その干渉以上に類似性はプラスの方向に働くと思われる。また L1 (フランス語) を母国語とする者が L3 (中国語) を学習する場合、その初歩の段階で、学習者は L3 を使おうとするが、遅かれ早かれ、L1 に戻って、L1 の言語知識で L3 を使おうとするだろう。ところが、L1 と L3 の間には対応する言語的カテゴリーが乏しい。すなわち L1 と L3 を結ぶチャンネルが殆んどない。このような場合、干渉が大きくおこるのは当然ではないだろうか。次章で触れるが、英語を学習するチェツコ人の誤りを分析した Dušková (1969) の報告によると、「母国語にない要素の学習は難しい」という Lado の仮説はチェック語(その他のスラヴ語)になくて、英語にある、冠詞の学習があてはまると、具体例をあげている。

一方、Oller, Zeiahosing (1970) が行ったカリフォルニア大学での外国人留学生に対するスペリングテストの実験報告は今まで述べてきた仮説を修正するような結果がでており、Lee の印象的な批判を裏づけるような報告である。それによると、ローマ文字を母国語として使用する留学生158人と非ローマ文字を母国語とする198人の留学生の英語のスペリングの誤りを調査した結果、予想に反して、ローマ文字圏の学生のスペリングの誤りの方が多く、正しいスペリングの語数も非ローマ文字圏の学生より少なかったのである。

この問題と、従来の仮説との関係はどう考えるか。Weinreich や Haugen の仮説は一般的には妥当なものであったにしても、これを性急に外国語学習にあてはめ、一面的にわり切りすぎたきらいがあった。この仮説に対しては、実際の学習の裏づけと共に、いろいろ解明しなければならない具体的な問題が含まれていると考えられる。例えば、母国語からの干渉にしても、学習の段階によっても干渉の度合は異なるであろう。学習の初期の段階では、Lee も

経験したように干渉は高いけれど学習が進むにつれてそれは少なくなる。それと同時に、こん度は、すでに学習されたものからくる干渉の問題が生ずる、即ち同じ言語内での干渉の問題がおこってくる。また干渉の問題は、音声面では顕著であることはすでに知られているけれど、統語面、語い面では果して同じような結果が生じるか。また先に触れたスペリングの問題についても、たとえ母国語がローマ文字圏に属する学習者でも、他の国語の、この場合は英語であるが、writing system を学習することは、なかなか困難であることが理解され、他のスペリングからの類推による誤りが目立つことから、同一言語内での干渉の問題が生れてきたのではないか。Weinreich から引用した冒頭の仮説に関して、具体的な裏づけ、異った角度からの研究などを通して外国語学習についてこれからも多くの点が明らかにされることと思う。

### 3. 成人が外国語を学習する際に、母国語から干渉を受けて誤りをおかす

この仮説について構造言語学に立つ外国語教育学者たちが言ったことは次のように要約することができる。

母国語を学ぶのと、外国語を学ぶ場合の決定的な違いは、学習者が外国語を学ぶ時までには、(10台に達する前は別として)意識する、しないにかかわらず、母国語の言語体系を習得してしまっているということである。そして外国語をまだ母国語が定着していない10台前に学習するならば、母国語からの干渉もずっと少ないが、年令を重ねるにつれて、母国語はますます身についていくので、母国語の文法体系や、言語体系が、学ぼうとする外国語の言語体系と干渉をおこす。従って10才を過ぎれば、外国語を、母国語を覚えるように学ぼうにはいかない。すでに身につけている母国語が、学ぼうとする外国語と干渉をおこす。このことが、母国語の学習と、外国語の学習の過程をまったく異ったものとしている。そして実際の学習では、音声面でこの干渉がもっとも顕著に現われる。(Politzer 1965参照)

「外国語学習と、母国語学習の過程は異なる」という従来の考え方は65年以後の子供の母国語習得の研究が盛んになるにつれ、また言語能力 (language competence) が問題にされるようになって修正を迫られている。この問題について Newmark (1966, 1968) Reibel (1966) の論文は示唆に富んでいる。以下彼らの批判を中心にこの問題を考えてみる。

彼らは、二言語併用の子供たちは、どんな方法で言葉を覚えようとも、干渉から生れる大きな困難を感じることなしに、家庭では一つの言葉を使い、他の場所では他の言葉を使うという事実から、実際の教授者たちは、学習者たちに、母国語と外国語との区別に目を向けさせる工夫をするよりも、母国語が使われる場面とは大きく違っている外国語の使われている場面を作り出すことに工夫すべきだと主張している。そして構文を中心にし、場面を無視してする文型練習の代りに、対話の暗誦を提案している。また教室内で学習者たちが自分で役割を作り出して劇をすることは教育的にみて大きな武器であるとしている。確かに言葉が場面と密接に結びついて使われているのは疑いもない事実であり、実際に、英語の表現を日本語の助けなしに、その使われた場面と直接結びつけて覚えていることがよくある。むしろ、この場面の設定で、外国語学習の問題点がすべて解決するというわけにはいらないが、外国語学習にあまり多くの母国語との区別を持ち込みすぎる構造言語学流の授業に対して一つの警鐘と考えることができる。しかし実際面で、初歩の学習段階では、あるきまった外国語の

表現対して、その場面を作りだすことは容易であるが、学習が進んだ段階に即した場面を作りだすことはなかなか難しいことである。Newmark や Reibel の提案が正しいとしても、教室内から構文を中心に配列された英語の教材をまったく取り除いてしまうというのは妥当ではない。

確かに「言語は習慣の束である」という仮説に立った文型練習が、習慣形成が正しくできあがるまで、実際のコミュニケーションは避けるべきだ、として人工的な練習に終始したことに大きな欠陥があった。しかし、文型練習の中にも場面をとり入れようとした試みもいくつかなされていることも知っておきたい。(Fries 1961参照)

「母国語からの干渉を受けて誤りを生ずる」という問題について、Newmark — Reibel は母国語からの干渉という現象は生じていないとしている。彼らによれば、母国語からの干渉という問題は、学習者の学ぼうとする外国語に対する無知 (ignorance) の問題に帰結することができる。従って干渉に対する治療は、その無知に対する治療である。学習者がある言葉を学習しようとする。しかし、その学習の初期の段階では、まだ多くの学習していないものがある。学習者は新しい言葉について十分な訓練を受けていない。ところが学習者は、教師によって、また内心の話そうとする気持によって、話すなり、読むなり、書くなりの行動をおこすように仕向けられる。その場合、学習者は、すでに自分でよく知っている母国語で、まだ知らない外国語の埋め合せをしようとする。その外国語を知っている観察者の目には、この学習者は、母国語の習慣で、外国語の習慣を代用しているように映る。しかし、学習者の側から見ると、彼は最善を尽しているのであり、自分のまだ不十分な訓練の欠陥を補うために自分の知っている母国語の助けを借りているのだとする。(従来の立場からはこの現象は母国語からの干渉と考えられるのだが。)そしてこの問題を解決する最上の方法は、干渉を克服しようとして、母国語、外国語の対照点を系統的にドリルするのではなくて、外国語そのものを、より効果的に訓練することだとしている。結論として、彼らは子供と成人の言語の習得能力は、量の上では違っても、質的には同じだとし、母国語と外国語の違い点をそれぞれ考慮した構文を練習するのは無意味で、実際に使用されている外国語のいろいろな実例の練習と、観察が、外国語を習得させるのであり、分析は学習者自からが行うと主張している。

彼らの意見は確かに、今まで余りに構造、構造と騒ぎたてて、分析した母国語と外国語の対比による言語習得の欠陥をついている。そして実際の用例を重視し、場面を高く評価する考えには賛成である、しかし彼らの「無知論」について言えば、それがユニークな見方であるけれど、いくつかの疑問点がある。例えば、performance でなく、recognition の面ではこの問題はどうなるか。日本人が、英音の bat pet など聞いた時に バット、ペットと促音があるように聞きとるのは、それは無知であるから、と片づけられるだろうか。母国語の音韻体系からくる干渉と考えた方が都合がよくないか。この無知の内容がはっきりしないけれど、これが、学習者の言語能力 (competence) の欠陥をさして言っているのなら、学習者が、外国語のある面をまだ習得できないのは言語能力がないから当然ということになる。外国語を学習し始めた時に、母国語に戻ってしまうのは、果して母国語からの干渉があるからか、それとも外国語をよく知らないからか。母国語からの干渉が先で戻るのはか外国語への「無知」がそうさせるのか。堂々めぐりになってしまう。

また彼らはブルームフィールド流の行動主義を拒否したけれど対話文や会話文の暗記は戦時中に Army Method で行われたものではなかったか。そしてこれは中学や高校の外国語学習でもっとも嫌われる学習活動の一つではないだろうか。対話文や会話文の暗記は場面の問題を別としても人為的にやらねばうまくいかないものである。

また彼らは、子供たちと大人は基本的には同じやり方で言葉を学ぶと仮定しているけれど発音は別として、大人たちは教え方がよければ子供たちよりもずっと早く外国語を学ぶことができる筈である。大人たちが子供たちより優れていると考えられるものの一つに文法的な類推ができるということがある。これは大人と子供の能力の質的相違と考えられる。彼らの考え方が具体的に教室内に持ちこまれて、具体化され効果をあげるには、まだ時間がかかるように思える。

最後に学習者が外国語を学ぶ際におかす誤りについて触れたい。対照言語学が、母国語と外国語を比較分析する作業によって誤りを予測できるという仮説をとってきたこともあって、母国語からの干渉が誤りを生むという考えが強く主張されてきた。たとえば Lado (1950), Politzer (1965)。

A rather common error among Spanish and Portuguese speakers learning English is the addition of to after must in the pattern, "I must go to the library." They are inclined to say, "I must to go to the library." This tendency results from the students' native language habit of using gue in similar pattern (Spanish "Tengo gue in"). (Lado)

In the area of vocabulary or word meaning, the main problem in foreign language learning is again created by the native language. (Politzer)

誤りを母国語からの干渉という一面だけで捉えるのは無理で、誤りにはまだ他の要因があることは、経験から考えても予想できる。従来の構造言語学流の考えに対して、学習者の言語能力 (competence) の問題から誤りについて触れたのは S. P. Corder (1967) が始めてであった。

彼は、誤りは外国語を学習している学習者の、外国語に対する自己の変化しつつある過渡期の言語能力を示すものだとし、記憶の欠如、身体的状態から生れる偶発的なものと、学習者の言語能力を表わしている誤りをはっきり区別している。さらに Corder の考えを受けて Wilkins (1968) は学習者が新しい外国語を身につける際に母国語の干渉はあるけれど、学習された外国語が干渉の原因になると述べ、このことは対照言語学で予測できないことであるとしている。V. Cook は (1969) すでに触れた Newmark — Reibel の論文の上にとって、母国語習得の理論から見ると、誤りは子供のたどらなければならない過程だと考えられるのに、外国語学習では、誤りは有害なものとしているが、外国語学習者も誤りをする自由を持ってよいとし、移民の子供たちの示す誤りを嘆かないで、本国人の子供のたどった道に沿って、本国人の子供たちの持っている言語能力の方向に移民の子供を進めるべきだとしている。

以上述べてきたいくつかの研究は具体性に乏しいが、次に述べる二つの論文は日本人が英語を学ぶ際の誤りの研究にいくつかの示唆を与えてくれると思われる。

Dušková は大学院を卒業した50人の科学専攻のチェコ人に、最近の海外旅行の感想、与えられた問題に対する考えなどを英語で述べさせ、その結果の分析を詳細に行っている。

この場合、もちろん正書法についての誤りや、いわゆる *careless mistake* というようなものは除外し、学習者によって何度もくりかえされる、体系的な誤りと考えられるものだけをとり扱っている。

その中で母国語からの干渉と考えられるものに、文の構成、語順に関する誤りがあり、冠詞の誤りは、この小論の最初にあげた Lado の仮説によくあてはまるとしている。一方、形態上の誤り、*We was*, *There does not exist* などには母国語からの影響はないとしている。

まとめとして、*production* については、(この場合は書くことについてであるが) 母国語と外国語の両方に存在するが、果す機能が異なる文法的特徴は、多くの誤りを生むけれど、最大の困難点は、母国語には存在しない文法的特徴が、外国語にある場合であるとしている。そしてこの例としてチェッコ人がくりかえしおかし英語の冠詞の誤りをあげている。

最後に誤りを言語能力の面と、母国語対外国語という観点ではなく、目標とする英語内での誤りという立場から誤りを考える Richards (1972) の考えに触れる。学習者の母国語に関係なく、くり返される誤り、たとえば *Did he comed, he coming from Israel, I can to speak French* というようなものを、彼は言語内 (*intra lingual*) の誤りで、学習者の言語学習の発達上の誤りとし、これはある特定の段階での学習者の言語能力を反映しており、言語習得の一般的特徴を示すと考えている。彼は中国人、日本人、ビルマ人、チェッコ人、ポーランド人、フランス人などがおかし誤りを資料として (ただし一部を除いて彼自身のオリジナルな資料ではないが)、発達的な誤りを、次の三つに分類している。

1. *Generalization* たとえば *he can sings, we are hope* というような誤り, 2. *Ignorance of rule restriction* この例としては *The man who I saw him. I made him to do* など。また誤った類推から生じる誤り, *we talked about it* から *we discussed about it. ask him to do it* が *make him to do it* になったりする例をあげている。またこの例として英語の冠詞の誤りが、合理的な推理によっておきていることをこの例に属させている。
3. *In complete application of rules* この例としては、*What was she saying?* に対して、*She saying she would ask him.* と答えたり、*What's she doing?* に対し、*He opening the door* と答えるようなものをあげている。

結論として、外国語学習において、母国語からの干渉は、明らかに大きな困難をひきおこす要因をなしており、対照分析は、二ヶ国語言語間の干渉する場所を見つけることに意味があることを示しているが、多くの誤りは、学習者が言語を習得する際にとりやり方や、学ぼうとする国語内のそれぞれの項目の相互の干渉から生れるとし、これは対照分析では説明できないとしている。

以上二つの仮説が、今まで、外国語学習での問題点を、「構造の差異」とか「干渉」という一面だけから見て断定してきていたのであるが、それらの問題はもっと多くの問題を含んでいることが、いろいろな研究の発展によってわかってきている。また中には、以上の仮説を否定する考えもあることを述べたのであるが、教室内での実際の外国語の授業は一つの理論、一つの実験の結果だけに頼って行うものではないことも述べたつもりである。

## 参 考 文 献

- Corder, S.P. 1967. The significance of learners errors. IRAL. 7.161-170.
- Cleveland, H. et al. 1960. The overseas Americans. New York : Mac Graw Hill.
- Cook, Vivian J, 1969. The analogy between first and second language learning. IRAL. 7.207-216.
- Dusková L. 1969. On sources of errors in foreign language learning. IRAL. 7.11-36.
- Dipietro R.J. 1971. Language structures in contrast. Rowley. Massa : Newbury House Publishers. 13.
- Diller, K.C. 1971. Generative Grammar, structural linguistics and language teaching. Rowley. Massa : Newbury House Publishers.
- Dulay, H.C. and Burt, M. K. 1972. Goofing : An indicator of children's second language learning strategies. Language Learning. 22.235-252.
- Jakobovits L. A 1970. Foreign Language Learning. Rowley, Massa : Newbury House Publishers. 204.
- James Carl 1971. The exculpation of contrastive linguistics. London : Cambridge Univ. Press. 62. In Nickel. G. (ed) Papers in contrastive linguistics.
- Lee, W.R. 1968. Thoughts on contrastive linguistics in the context of language teaching. In Alatis. Georgetown Monograph series. 21.185-193.
- Lado, Robert. 1950. Pattern Practice completely oral. Language Learning Vol. 1. In selected articles from Language Learning No.1. 43.
- 1957. Linguistics across cultures. Ann Arbor : Univ of Michigan. 2.
- Newmark L. and Reibel, D.A. 1968. Necessity and sufficiency in language learning. IRAL 6.145-161.
- Oller, J. W. Jr. et al. 1970. The contrastive analysis hypothesis and spelling errors. Language Learnings. 20.183-189.
- Reishauer, E. 1964. Living English in the world today. In current English textbook. Tokyo : Kenkysha. 12.
- Richards, J. C. 1972. A non-contrastive approach to error analysis. Journal of English teaching. 5.251-260.
- Weinreich U. 1953. Language in contact. The Hague : Mouton. 1.
- Wilkins. P.A. 1968. In Valdman's trends in language teaching : bookreview. IRAL. 6.101.
- 諏訪部 真 1969. 「言語干渉と日・英両語の音節構造の比較」長野高専紀要 3.275-282
- 1971. 「日・英語学習におけるモーラ音素とその干渉の問題」長野高専紀要 4.53-60.